

---

## 〈徴候 symptom〉について

—美学と精神医学の交差的試論

佐藤香奈穂（京都大学）

---

G・ディディ＝ユベルマンは『残存するイメージ』（人文書院, 2005）においてヴァールブルクの重要な概念を幾つか抽出してみせたが、その一つが *symptôme* である。本発表は、「名前のない科学」に向けて見出されたこの概念を通じてヴァールブルク＝ディディ＝ユベルマンの試図を今日的に引き継ごうとするものである。それと同時に、美学の範疇から超え出て、精神医学的な広がりをも持つ横断的知の可能性として *symptom* すなわち〈徴候〉を示す試みである。1918年、精神病の闇の中でそれまでの美術史研究に医学的見地を重ね合わせたヴァールブルクの意図が、約1世紀の後のわれわれに預言的に響くだろう。

これまで美学と精神分析を含む精神医学の横断的試みは、相互への従属によって為されてきた。例えば、ある時代や社会の狂気を判断するために精神分析は道具化され、病いの表象は具現化された。芸術療法やアール・ブリュットは精神の非正常性を芸術に媒介させることで社会化する。しかしそれらは概して横断と呼べるものではない。なぜならそこには、理性的思考では決して能わない病苦の深淵への畏怖と危機の認識、そして美に関わる生命的な契機が圧倒的に欠落しているからである。対して、1950年代末までに向精神病薬が準備されて以降、今日の精神医学の中心には薬物が据えられ、かつてそこにいたはずの人間の感情や狂気、痛みを表出について考究する臨床的美学者とでも呼ぶべき精神科医の姿は絶滅しつつある。

「病苦は責任のある活動である」（I・イリイチ）ことは忘れ去られ、「寛解」という謀略による堂々巡りによって精神的な病いは完全に受動化された。

ソシュールやパース以降の記号学（論）的議論が *sign* の訳語として「記号」を得たのに対し、*symptom* は「症状」や「兆候」等、文脈によって未だに異なる訳語が与えられている。ここで発表者は *symptom* を〈徴候〉としながら、それが記号や象徴とは異なる出自や機能、時間や身体への関わりを持つことを指摘する。そして、現れながら後退し、出来事であると同時に潜在性であるという弁証法的結晶として形成される〈徴候〉の美学的可能性も示されるだろう。〈徴候〉においては矛盾が総合されぬまま維持され、明示的には現れない現象が見つめられる。その地平は「見えるもの」や「見えないもの」でも、「読めるもの」でもない。例えば〈徴候〉は「釈義」という無数の潜在的意味の母体であるが、それはテキストの外部へ抜け出し意味の開放をもたらす。〈見える⇔見えない〉や〈見る⇔知る〉の間で引き延ばされ、重合し、停滞し、逆戻しすらされる時間性の庇護下にある〈徴候〉は、科学的論証とは異なる矛盾的事実にわれわれを導く。それは、決して解決されない病苦や危機へとわれわれを露頭 *exposure* するという美学と精神医学という運命的な二つの領域の横断的可能性に他ならない。